第２章

日本青年海外派遣

第２節　ドミニカ共和国派遣

行動地図

行動記録

訪問先一覧

団長報告

参加青年代表報告

ディスカッション成果

ドミニカ共和国派遣　行動地図

ドミニカ共和国

ドミニカ共和国派遣 行動記録

月日	時間	内容	滞在都市
10 月 5 日 （木）	17:00 16:30	東京（成田）発 （UA078） ニューアーク着／ニューアーク泊	成田 ニューアーク
10 月 6 日 （金）	10:00 13:55 16:00 17:00	ニューアーク発（UA2404） サントドミンゴ着 オリエンテーション（於：宿舎内） 夕食	ニューアーク サントドミンゴ
10 月 7 日 （土）	8:30 - 11:00 16:30	日・ドミニカ文化センター（日本語学習機関） との交流 ホームステイ・マッチング ホームステイ（各自） 嶽釜日系人協会会長への挨拶（団長、副団長）	
10 月 8 日 （日）	18:00	ホームステイ終了、ホテル集合 夕食	
10 月 9 日 （月）	9:00 - 9:30 10:00 - 11:30 12:30 - 14:00 16:30 18:00	移住記念碑献花（於：移住記念碑） 青年大臣表敬（於：青年省） 日系企業 NISSHA 視察 文化体験 夕食	
10 月 10 日 （火）	8:00 - 10:00 11:30 - 13:00 16:00 - 17:30 19:00 - 22:00	緊急事態センター訪問 JICA 関連サイト訪問（ドゥケサ廃棄物処分場） 昼食 JICA ボランティアとの意見交換 （於：JICA 事務所） 若手日系人との交流、夕食会 （於：日本語学校）	
10 月 11 日 （水）	7:30 - 9:30 10:30 - 18:00	ビーチクリーン（於：市内ビーチ） UASD 大学交流会 1 日目	
10 月 12 日 （木）	9:00 - 15:00 19:00 - 21:00	UASD 大学交流会 2 日目 市内視察 高木大使主催夕食会（於：大使公邸）	

月日	時間	内容	滞在都市
10 月 13 日 （金）	10:30 10:45 12:00 15:05 19:10	宿舎チェックアウト 宿舎発 サントドミンゴ空港着 サントドミンゴ発（UA1473） ニューアーク着／ニューアーク泊	サントドミンゴ ↓
10 月 14 日 （土）	19:00 - 21:00	ニューアーク発（UA079）	ニューアーク
10 月 15 日 （日）	14:30	東京（成田）着	成田

Date	Time	Activity	City
Oct.5 (Thu)	17:00 16:30	Departure from Tokyo (Narita) (UA078) Arrival at Newark / Overnight in Newark	Narita Newark
Oct.6 (Fri)	10:00 13:55 16:00 17:00	Departure from Newark (UA2404) Arrival at Santo Domingo Orientation (at hotel) Dinner	Newark Santo Domingo
Oct.7 (Sat)	9:00 - 11:00 16:30	Discussion with the Nichido Japan-Dominican Cultural Center (Japanese Language Learning Institution) Homestay Matching Homestay (Individual) Greeting to the President of the Takegama Nikkei Association (Leader and Sub-Leader Only)	
Oct.8 (Sun)	 18:00	Gathering at the hotel Dinner	
Oct.9 (Mon)	9:00 - 9:30 10:00 - 11:30 12:30 - 14:00 16:30 18:00	Flower Offering at the Emigration Memorial Monument Courtesy Call on the Minister of Youth (at hotel) Visit to NISSHA, a Japanese company Cultural Experience Dinner	
Oct.10 (Tue)	8:00 - 10:00 11:30 - 13:00 16:00 - 17:30 19:00 - 22:00	Visit to the Emergency Center Visit to JICA-related Site（Duquesa Landfill） Lunch Discussion with JICA Volunteers（at JICA Office） Exchange with Young Nikkeis, Dinner Reception (at Japanese Language School)	
Oct.11 (Wed)	7:30 - 9:30 10:30 - 18:00 19:00	Beach Clean（at City Beach） UASD University Exchange Event Day 1 Dinner after returning to the hotel	
Oct.12 (Thu)	9:00 - 15:00 19:00 - 21:00	UASD University Exchange Event Day 2 City tour Dinner Reception hosted by Ambassador Takagi (at Ambassador's Residence)	

Date	Time	Activity	City
Oct.13 (Fri)	10:30 10:45 12:00 15:05 19:10	Check-out Departure from Accommodation Arrival at Santo Domingo Airport Departure from Santo Domingo (UA1473) Arrival at Newark / Overnight in Newark	Santo Domingo ↓
Oct.14 (Sat)	19:00 - 21:00	Departure from Newark (UA079)	Newark
Oct.15 (Sun)	14:30	Arrival at Tokyo (Narita)	Narita

ドミニカ共和国派遣　訪問先一覧

訪問日 10 月 7 日

訪問先	日本ドミニカ文化センター日本語学校（Nichido：Centro Cultural Dominico Japonés）
訪問概要	私立学校の休校日を活用した日本語教室。レベルごとにクラスが分けられ、日本語が話せる教師によって、授業が行われている。教室だけではなく、アメリカや都市部ではない場所に住む学生も学べるようにオンラインでも映像を繋いで授業が行われていた。それぞれの教室に約 2 名ずつ日本参加青年が割り当てられ、自己紹介や質疑応答をして交流が行われた。最後には体育館に集まり、日本派遣団はソーラン節を披露した。またバンドの音楽に合わせてみんなでダンスを行い、親睦を深めた。中学生から 30 代後半の大人まで幅広い世代が同じ教室で勉強しているのが印象的であった。現地の学生に、日本語を学ぶモチベーションを聞いて一番多かったのはやはりアニメ・漫画であり、若者を中心に日本のエンタメコンテンツが広く浸透しているのを実感した。オンラインでも授業が行われていたため、日本人として現地で参加するだけでなく、オンラインで日本国内にいながらも気軽に日本語教育に貢献できると思った。

訪問先	ホームステイ
訪問概要	土日の二日間、団員それぞれがホストファミリーとホームステイを経験。派遣団から離れ、個人として、現地の方との暮らしの中で、文化や価値観について間近で学んだ。手作りの伝統料理を食べたり、小さなボートに乗ってマングローブの中に入っていったり、団員がそれぞれ、各家庭の中で貴重な時間を過ごすことができた。プログラムで「派遣団」として活動するときに見る景色とはまた異なり、様々な角度からドミニカ共和国を理解する良い機会になったと思う。

訪問日 10 月 9 日

訪問先	ドミニカ日本人農業移住記念碑（Monumento A La Inmigración Agrícola Japonesa）
面会者	嶽釜 徹 氏 – ドミニカ日系人協会会長
訪問概要	これまでの移住者の貢献を称え、サントドミンゴ港の近くに建立された移住記念碑を訪れた。音楽隊によるドミニカ共和国と日本の両国の国歌演奏ののち、献花を行い、嶽釜会長から移住の歴史について説明いただいた。ドミニカ共和国への移住が始まった時、移民協定がまだ定まっていなかったため苦労したというお話が印象的だった。記念碑は、自分たちの身分証明の意味もあるとおっしゃっていたが、建てられたのが平成 24 年(2012 年)でまだあまり経っておらず、ここまでに大変な苦労があったのだろうと推察した。

訪問先	青年省 (Ministerio de la Juventud)
面会者	Rafael Jesús Felíz García 氏 – 青年省大臣
訪問概要	ドミニカ共和国の青年省（Ministerio de la Juventud）の大臣である Rafael Jesús Felíz García 氏を表敬訪問した。大臣からの自己紹介やドミニカ共和国の歴史についてのお話の後に、団員から自己紹介を行った。団員のバックグラウンドや参加動機に関心を持たれたようで、団員一人一人に対して対話をしようとする姿勢が印象的だった。 また、私たちの活動を高く評価してくださっており、ドミニカ共和国と日本の友好を多方面で深めようと取り組まれているのが伝わった。

訪問先	Nissha Medical Technologies CEA Global Dominicana, S.R.L.
面会者	Roberto Rodriguez Sigaran 氏 – General Manager Juan Carlos Puello 氏 – Operations Manager
訪問概要	医療機器メーカーの工場の実態を初めて覗く機会となった。特にドミニカ共和国工場で作っている器具は、手術などで私達の身体の中に直接体内に入るもので、精度もさることながら、高い衛生管理も求められる。実際工場では、徹底した衛生環境の整備かつ熟練の方の慣れた手付きで作業されおり、非常に感心した。その一方で、工程の中でかなり自動化されているかと思いきや、マニュアルワークでないと作れない工程も多いと知り、現時点での技術の限界と現実味を感じた部分でもあった。

訪問先	Choco Pick（チョコレート作り体験工房）
訪問概要	Choco Pick にてチョコレート作りを行った。 カカオから取り出した豆を炒る作業を見学し、殻を取り出して中身をすりつぶし、ボール状にする体験をした。メキシコのマヤ文明ではボール状のチョコレートをお湯で溶かして薬として飲まれていた。 また、液体のチョコレートをテンパリングする作業を体験し、トッピングを乗せてオリジナルのチョコレートを作成した。初めてホットチョコレートを味見した。私たちが普段買うような、砂糖やカカオバターがふんだんに使われているチョコレートやホットココアとは異なり、カカオニブの香りや苦みが強く感じられた。中南米地域では栄養価の高い薬のような存在であるという。嗜好品として親しまれているチョコレートとは違う味わい方を体験することができた。

訪問日 10 月 10 日

訪問先	緊急事態センター(Centro de Operaciones de Emergencias)
訪問概要	ドミニカ共和国の災害対策と平時および災害時の対処について学んだ。災害時は誰もがパニック状態になるものでスピード感も求められるため、緊急事態センターが対策本部として、国内の公的機関や外国機関とのコミュニケーション窓口となり、データ収集から政策提言まで行うのは、災害対策を効率的に進める上で機能的だと感じた。一方、このように過去の災害を踏まえハード面はしっかり整備する反面、全ての緊急対策はまずはコミュニティ単位でできるものと考え、全国一斉での避難訓練の導入・実施などに取り組んでいるとのこと。これらソフト面の対応は、義務教育レベルで浸透している日本のノウハウが役に立つところがあると思う。実際、日本からの消防車 8 台の寄贈の話などもあったが、災害対策においても日本のことをリスペクトして下さっていると感じた。災害時の瞬間的な対応に終始せず、その後のスピード感ある復興・復旧により被害拡大を抑えること、国民レベルでできる予防意識など、全てセットで考えていかなければならないのだと感じた。

訪問先	ドゥケサ廃棄物処分場（Vertedero de Duquesa）
訪問概要	ドミニカ共和国の首都であるサントドミンゴ中から集められたゴミが手付かずのまま、集積されているドゥケサ廃棄物処分場。これから JICA が国際協力の一環としてプロジェクトを始めようとしている。今までドミニカ共和国で訪問した機関は清潔で綺麗な場所が多かったため、よりドゥケサ廃棄物処分場の現状に衝撃を受けた。6 メートル以上にわたってゴミが積み上げられており、その匂いや粉塵は強烈なものだった。また、山のように積み上げられたゴミの中からお金になるものを探している人が数多くいたことにも驚いた。

訪問先	JICA ドミニカ共和国事務所（JICA Dominican Republic Office, Agencia de Cooperacion Internacional del Japon）
面会者	坂口幸太 氏 – ドミニカ共和国事務所所長
訪問概要	JICA ドミニカ共和国を 2 時間ほど訪問し、所長の坂口様から JICA ドミニカ共和国の詳細（ドミニカ共和国で行われるプロジェクト、ドミニカ共和国の経済/産業）について伺うとともに、JICA 青年海外協力隊ボランティアの方 5 名からお話を聞いた。さまざまな思いを胸に協力隊に参加していることに感銘を受けた。ボランティアの 1 人である佐藤さんは定年退職後に青年海外協力隊に参加し、現在はドミニカ共和国の鉱山省省エネ副大臣室でドミニカ共和国内の節電プロジェクトに従事している。熱い思いを持って、ドミニカ共和国の節電に取り組んでいる姿がとてもかっこよかった。また青木さんは、ドミニカ共和国の日系人コミュニティの運営/開発に携わっており日系人の生涯についてインタビューを行っていた。ボランティアの方々のキャリアのお話を聞くことができ、これからのキャリアを考える貴重な時間となった。

訪問先	ASONAJA(Escuela de Idioma Japonés)
訪問概要	若手日系人(日系 2 世、3 世等)と一緒にバーベキュー、バレーボール、ソーラン節披露などをして交流した。ドミニカ共和国の国民的スポーツが野球とバレーボールであることは事前に調べたりしていたが、実際若手日系人の方とバレーボールをした際、彼らのチームワークと上手さに感動した。実際、ドミニカ共和国の女子バレーについてはパリ 2024 オリンピック予選を 1 位で通過するなど、世界トップクラスの強豪国であり、女子学生の間でもバレーがかなり流行っているようである。 今回の交流の中では日系人と日本人派遣団がミックスでチームを組んでゲームすることもあり、初めて会って数時間にも関わらず、同世代での絆を深めることができ、とても嬉しく思った。 その後は日本人派遣団からのソーラン節と書道のパフォーマンスを行い、特に書道に関しては非常に喜んでいただいた。 また、バーベキューも振る舞っていただき、美味しいお肉やドミニカ共和国のビールを楽しんだ。

訪問日 10 月 11 日

訪問先	Playa de Güibia
訪問概要	サントドミンゴのビーチで現地の大学生たちとペアになり、ペットボトルや発泡スチロール、ガラスなどのビーチに流れ着いたゴミを拾い集めるビーチクリーン活動を行った。ドミニカ共和国派遣団の中で今までにビーチクリーンを行ったことのある団員はおらず、全員にとって初めての経験となった。時間の関係で最後の工程である砂とゴミの篩い分けまでは辿り着かなかったが、いくつもの袋が一杯になり、数十メートルに渡りゴミで覆われていたビーチが綺麗な砂浜になる過程を見ることができて、とても清々しい気持ちになった。 印象的であったことは、ビーチクリーンの次に向かったサントドミンゴ自治大学（UASD）でのディスカッションの時である。気候変動から生じている問題として UASD の学生が sargazo(海藻の一種)の問題をあげていた。ビーチのゴミは確かにプラスチックゴミが多かったが、同時に打ち上がった sargazo も目立っており、その臭いや見た目が景観に影響を与えていることは明らかであった。ディスカッションの前に実際にビーチクリーンを経験したことで、容易にそのイメージを掴むことができ、議論を深めることができた。実際の体験をディスカッションに活かすことができた良い例となったように感じた。

訪問先	サントドミンゴ自治大学 (Universidad Autónoma de Santo Domingo)
面会者	Dr. Antonio Medina 氏 – Director, National and International Relations and Cooperation, Universidad Autonoma de Santo Domingo Rhademes Silverio 氏 – Director
訪問概要	サントドミンゴ自治大学 (Universidad Autónoma de Santo Domingo、UASD)にて、現地の大学生 20 名とディスカッションをした。プログラムは 2 日間に亘り、気候変動及び災害対策について 4 グループに分かれてプレゼンテーションを作り上げた。加えて、大学長からの講話やドミニカ料理の昼食、現地大学の民族舞踊サークルからの披露などもあり、プログラムを締め括る充実した 2 日間となった。日本では先ず役割を決め、前提を確認し、ステップに則って進めるという型が浸透しているが、ドミニカ共和国では話したい人が話したいことを恣意的に話す点が見受けられた。内容面では現地の学生が自身の専門分野とテーマを結び付け解決策を提案し、勉強になった。

訪問日 10 月 12 日

訪問先	サントドミンゴ自治大学（Universidad Autónoma de Santo Domingo：UASD）
面会者	Dr. Antonio Medina 氏 – Director, National and International Relations and Cooperation, Universidad Autonoma de Santo Domingo Rhademes Silverio 氏 – Director
訪問概要	前半のディスカッションでは、気候変動の深刻さと対策について、後半では災害対策の現状について意見交換を行った。日本とドミニカ共和国では気候変動・災害対策でネックになっている部分が異なっていることが明らかになった。例えば、ドミニカ共和国では対策が進まない理由に政府が大きく関係していた。歴代の政府が災害に対するアクションプランを立てるものの、政権が交代してしまうとアクションプランが全く使われなくなってしまうという問題点を抱えていた。さらに、気候変動対策でも、観光に投資が集中してしまい、気候変動対策への投資が進んでいなかった。

訪問先	在ドミニカ共和国日本国大使館（Embajada del Japón en República Dominicana）
面会者	高木昌弘 氏 – 特命全権大使 古川忠雄 氏 – 参事官 山本圭吾 氏 – 一等書記官
訪問概要	在ドミニカ共和国日本国大使館（Embajada del Japón en República Dominicana）にて、高木大使による夕食会に招待された。冒頭に、滞在中に得た学びについて川瀬、菩提寺が発表し、その後日本食やバチャータ、メレンゲを楽しんだ。ホストファミリーとしてお世話になった方や、ドミニカ共和国からのプログラム参加青年とも交流することができた。高木大使を含め、職員の皆様がフレンドリーに接してくださりリラックスした雰囲気で楽しむことができた。プログラムの有終の美を飾る良い思い出になった。

ドミニカ共和国派遣　団長報告

「日本代表青年」とともにドミニカ共和国へ

中田 昌和

＜はじめに＞

コロナ禍の中、オンライン交流での実施を余儀なくされていた、内閣府の国際青年育成事業の日本青年派遣事業が、久しぶりにオンライン交流だけでなく、対面交流も合わせた形で再開された。この日本青年海外派遣のドミニカ共和国派遣団の団長として「日本代表青年」とともに派遣されてきた。日程の都合などで、首都及びその近辺に限られてはいたがドミニカ共和国政府の青年大臣への表敬訪問、JICA 事務所での懇談や、環境や防災というテーマに沿った関係現場の視察、現地大学生とのディスカッションなどを行ってきた。しばらくぶりの派遣ということで、担当者や関係者の方もご苦労が多かったとは思う。この事業の中での参加青年一人ひとりの思い、受け止めは様々であると思うし、また、ここで派遣プログラムのすべてについて述べることはできないが、参加青年と過ごしたドミニカ共和国への派遣を中心に、青年の活動や対面交流の現場のなどで団長として感じたことなどを記してみたい。

＜事前研修から派遣まで＞

参加青年の選考後、まず7月には、10月の派遣に向けて、事前研修のために団員全員が東京に集まった。スペイン語も流暢に話せる青年、仕事や学業で外国経験豊かな青年、実際に外国に行くのは初めてという青年など、学生を中心としつつもさまざまな背景をもっていた参加青年が、団として初めて集い、短期間ではあるが合宿が行われた。参加青年たちは、非常にスマートで実務能力に長け、助け合い精神にも富んでいて、かつて本事業でドミニカ共和国に派遣された経験を持つ澁井副団長のアドバイスも受けながら、チームとなっていく姿が頼もしく思えた。

また、この事前研修の間に、東京のドミニカ共和国大使館を表敬訪問し、タカタ大使と直接お話をさせていただく機会も得た。非常に穏やかで優しい印象の方で、参加青年のスペイン語での質問に、スペイン語能力を褒めながら率直に答えていただいた。最後には、「ドミニカ共和国滞在を楽しんでほしい」と激励いただくとともに、両国の国旗をあしらったピンバッジを参加青年一人ひとりに直接渡していただいた。

そして、事前研修後は、派遣団として一度に集まれない中でも、ドミニカ共和国の歴史や社会についての学習、オンラインでのディスカッション練習やスペイン語の研修など自主的な取り組みのほか、今回の大きなテーマが防災対策と気候変動であることから、各青年の身近な防災の取組の確認、熊本在住の団員を中心とした熊本地震の災害遺構の現地訪問など、それぞれが積極的に取り組んでいった。

このように派遣に向けて、団として設定したスローガンである「学びをリアルに　つながりを未来に」が動き出していった。

その後、9 月には、今年度本事業の海外青年招へいで日本を訪れる、ドミニカ共和国、ペルー共和国の青年とのオンライン交流が実施された。自己紹介や今回のテーマに沿った防災対策についての発表など、機材や通信などの制約の中でも、コ

ロナ禍の中をくぐり抜けた青年たちは、オンライン対話の経験も豊富で、非常に手慣れた感じで議論に入っているように見えた。日本青年にとってはドミニカ共和国を訪問とその後の招へい青年との交流の前に、また日本に招へいされる両国の青年にとっても、やがて対面で交流を行うこととなる者同士、表情や雰囲気も感じながら話ができるのは、導入として効果が大きいと思われる。

なお、個人的には、このオンライン交流の中で、ドミニカ共和国、ペルー共和国青年の日本のマンガやアニメについての知識に驚かされ、そういう面での日本発のコンテンツの国際的影響力を改めて認識するとともに、彼らが言及していたマンガやアニメのいくつかを派遣前に見るきっかけを与えてくれた。

＜ドミニカ共和国派遣＞

10 月に成田を出発し、ニューヨーク経由でドミニカ共和国に到着した。現地でのプログラム調整に尽力いただいていた山本書記官とようやくホテルで対面することができた。この後、派遣期間を通じて本当にお世話になるのだが、中田から見ると、日本大使館の職員として、ドミニカ共和国にぴったりの快活で物腰のやわらかい方であった。青年たちも長旅の疲れもある中、期待に胸を膨らませていたものと思う。

1. 日本ドミニカ文化センター訪問

現地プログラムの最初として、まず、日本ドミニカ文化センターの日本語授業を訪問した。竹中校長によると、大きな学校の施設を借りて開催されていて、日本語の習熟度に応じた複数のクラスに分かれて参加させていただいた。一生懸命日本語を学習しようとする姿に心打たれ、また、先生方の熱意にも頭が下がった。見学というよりも、参加型あるいはインタラクティブな形で用意していただいていたこともあり、日本から遠く離れたこの地で日本語を学習する方々との交流は、参加青年も強い印象を受けたと思う。

日本語授業の後は、教室から会場を移して、広い体育館で、踊りを通じた交流会となった。日本語学校の生徒さんたちを中心とする青年たちと、暮らしのさまざまな場面で踊ることが息づいているこの国で、風を感じ、声を掛け合いながら、一緒に踊るという交流も、やはり対面交流ならではの機会として、この国の文化の理解に資するものと思われた。

なお、日本青年たちは、非常に限られた準備時間・環境の中で練習してきた「ソーラン節」の踊りを披露してくれた。派遣団員が一体となった群舞として、フォーメーションを変えながらの踊りは、日本代表青年のパフォーマンスとして、ドミニカ共和国滞在にあたっての彼らの思いを、日本に強い興味を持ってその場に参加してくれた青年たちにしっかりと伝えることができるものとなったと思う。

ついで、ドミニカ共和国側からも音楽とダンスの場を提供してくれた。生バンドの演奏をご用意いただいて、日本青年だけでなく中田まで、メレンゲ、バチャータと音楽に合わせてどんどん誘われ、ペアであるいは多くの青年たちが輪となって、さまざまなダンスを体験した。中田も頑張って参加させていただいたのだが、まさにドミニカ共和国まで来たな、と強く感じられた瞬間であったし、終わった後の日本青年の明るい表情などをみても、到着後最初の活動として、この機会をいただいてありがたいと感じた。

2. ホームステイ

ホームステイは、やはりこの事業においても非常に重要な機会となっていると思う。久々の対面交流ということで、準備段階から不安も、内心少しはあったのだが、たくさんのお土産とともに明るい表情で帰ってくる青年たちをホテルで出迎え

ると、今回のホームステイも、リアルの交流の一環として充実したものであったことが窺えた。

今回の派遣で接することのできる方々や状況は、この国のごく一部に限られ、多くの国と同様、政治、経済、社会など、さまざまな課題に向かい合っているのであることは青年たちも十分理解しているわけだが、ホームステイのような機会の青年同士の率直な会話などを通じて、この国を感じ、多角的に理解を深める機会になったと思われる。同時に、参加青年たちも、ホストファミリーや触れ合った方々に、それぞれの思う日本のこと、自分や仲間のことを発信してきてくれたものと思う。改めて、ホストファミリー、ドミニカ共和国における本事業の同窓会組織、その他関係者の皆さんの熱意とホスピタリティーに心より感謝したい。

３．国策ドミニカ共和国日本人農業移住記念碑への献花

戦後に始まったドミニカ共和国への日本人移住者については、派遣前に、自主的に有志が学習の機会をもっていたのだが、サントドミンゴにある「国策ドミニカ共和国日本人農業移住記念碑」を訪れ、派遣団として献花を行った。山本書記官、嶽釜ドミニカ日系人協会会長にも立ち会っていただき、現地でご苦労された日本人移住者についてのお話を会長から聞かせていただき、参加青年もそのことに思いを寄せることができたものと思う。その際、ドミニカ共和国側のはからいで、軍楽隊にドミニカ共和国国家とともに君が代を演奏していただいた。文字通りに日本代表青年として遇していただき、非常に胸が厚くなる思いであった。

4. ドミニカ共和国政府青年大臣表敬

青年省を訪問し、ガルシア青年大臣を表敬を行った。20 代という本当にお若い大臣で、我々派遣団を歓迎するとともに、本事業への熱い期待を述べていただいた。また、当初予定の時間を大幅に延ばして、団員一人ひとりに動機や抱負など発言の機会をいただき、感謝に堪えない。青年省から過去に本事業に参加された職員、団長として今年招へいされる職員も立ち合い、そして日本の高木大使にも同席いただき、「日本代表青年」としての意識を強める機会となったと思う。

5. 緊急事態オペレーションセンター等訪問

今回のテーマの柱である防災対策について、緊急時対応についての状況の視察のため、ドミニカ共和国政府の緊急事態オペレーションセンターを訪問した。中田自身、かつて行政の危機管理の一端に接したものとして興味深く見ることができた。幸い緊急時対応のさなかではなかったため、参加青年からの積極的な質問にも対応していただきながら、実際にオペレーションを行う関係機関のブースを配した部屋、情報の集約や発信を行う設備・機材なども見ることができた。国内各地の連絡体制、さらには国際的な協力についての説明なども含め、政府一体となって災害に対応する用意に努めている状況を知ることができた。さらには、隣接してある、市民が主体の民間防衛局の施設や日本から援助されたという車両・装備も見ることができた。

自助・共助・公助ということがよく言われるが、参加青年の一人ひとりが自分事として今後、考えを深めていくうえで示唆に富む機会となったのではないか。

6. JICA 関連施設訪問

日本の国際協力についての理解も深めるため、JICA の関連サイトと JICA ドミニカ共和国事務所を訪問した。

・ドゥケサ廃棄物処分場

環境に関わる JICA の関連サイトとして、首都サントドミンゴの北側のドゥケサ廃棄物処分場を訪問。現状、搬入後高く野積みされたままの状態で、これから JICA が入って改善に取り組んでいく必要が大きいと感じた。廃棄物処理に関し、処

分場までの途中の道路事情を含めたハード面での整備とともに、いわば廃棄物を出す側の意識を高めて行くことも課題のように改めて感じられた。現地の JICA 関係者の皆さんの今後の活躍により、少しでも現地での廃棄物処理の状況が改善されることを祈りたい。

廃棄物の減量を含め循環型社会を目指すのは、世界共通の課題であるので、本事業に参加する青年一人ひとりが、日本でも、ドミニカ共和国でも積極的に社会を牽引していってくれることを期待したい。

・JICA ドミニカ共和国事務所

参加青年は、やがては国際的な環境で活躍したいと思っている者もおり、日本の国際協力の現場で働く方々の率直なお話を直接聞ける貴重な機会となった。坂口所長からの総括的なお話の後に、少人数に分かれて、協力隊員の方一人ずつから個別にお話をうかがった。ドミニカ共和国での経験年数や働く専門もさまざまであったが、日本とは異なる環境の中での国際協力の現場の理解と同時に、ドミニカ共和国の人々と一緒に働いている中での話を通じてドミニカ共和国の人や文化についての理解も深めることができたのではないか。

7. 国立サントドミンゴ自治大学訪問

２日間にわたって、国立サントドミンゴ自治大学を訪問して、気候変動や防災についてのディスカッションなどを行った。

ロサリオ学術交流部長のリードのもと、今年日本に招へいされている青年を含む同大学の学生と日本青年との間で、グループに分かれてディスカッションを行った。

初めて会う青年たち同士で、ディスカッションも始めはぎくしゃくしたり、進め方に戸惑いを感じたり、コミュニケーションに課題を感じながら始まったように見受けられた。しかし、課題の共通性はありながら、それぞれの国情や対策の違いも出し合い、最終的にはグループとして一定の「まとめ」としてのプレゼンテーションを作って発表にまでこぎつけていった。その中では、語学力や表現力、国際情勢や地球的課題に関する見識、また、ディスカッションに関わるリーダーシップとフォロワーシップなどで、自らの強みや今後の課題を感じる機会となったのではないか。

8. 大使主催のレセプション

ドミニカ共和国滞在の最後の夜には、高木大使のご厚意で大使公邸においてレセプションを開催していただいた。今回の派遣でお世話になった方々も多く参加され、この派遣期間を振り返りつつ、大使館の方々だけでなく、派遣にあたってお世話になったさまざまな機関、会社などの方々に感謝の気持ちを伝えられる機会となった。

この際にも、参加青年たちは、スペイン語で、振り返りのプレゼンテーションを非常にスマートに行い、「日本代表青年」としての役割を果たしてくれた。

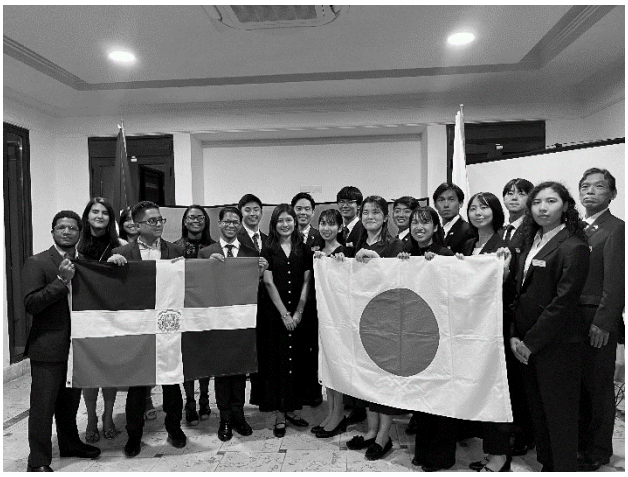
＜結語に代えて＞

この事業は、応募から考えても、派遣を終えるまでの期間が短い事業ではあるが、参加青年一人ひとりが、見たこと、聞いたこと、感じたり気づいたりしたことなどは、それぞれにとって事業終了後直ちに消化し整理しきれるものだけではないと思う。短期的に意識できるものとは別に、その中で得た人間関係を含めて、その後の生活の中で中長期的に、また無意識のうちに発現し、その意味を改めて意識しなおすこと、そして、その後の人生に生かされていくことになることもあると思う。その観点からは、その成果が長期にわたって考えられる事業である。

将来、同期の参加青年同士あるいは歴代の既参加青年が集まる機会だけでなく、それぞれの家庭、学業や仕事、暮らしの中のいろいろな機会を通じ

て、「あの時の経験」として思い起こされ、新たな発見もあることを期待したい。

久しぶりの派遣ということもあり、準備段階から最後まで、団長としても、もっとできたこと、するべきだったと思うことは多々あるが、今回の事業に関わっていただいた日本及びドミニカ共和国の関係機関の方々を始め、派遣にご協力いただいたすべての方々に改めて感謝を申し上げるとともに、今回参加した青年に対して勝手ながら期待と応援の気持ちを表して、筆をおくこととしたい。



大使公邸夕食会での集合写真

ドミニカ共和国派遣　参加者青年代表報告

明るく元気に、周りを笑顔に

高田　康士郎

過去の参加青年である友人の話がきっかけ

この事業のことは、過去に参加経験のある友人を通じて、10 年ほど前から知っていた。個人旅行では訪問し得ない政府系機関や施設を訪問できると聞いており、ずっと興味があり、毎年のように募集要項をチェックしてはいたが、日程的な壁もあり、いつの間にか何年も何年も過ぎてしまった。今回募集要項を見た際、幸いにも仕事を調整すれば何とかなる日程だと感じたため、一期一会の気持ちでチャレンジしたいと思い、思い切った休暇取得も念頭に、応募した。

書類選考とグループディスカッション

私は、募集要件の 33 歳以下の年齢を超えていたが、派遣団のテーマである「災害・気候変動問題」に関係する分野に従事していれば 40 歳以下でも可だったので、自身のキャリアである非鉄金属業界での勤務経験、特に自社の銅鉱山開発事業などの業務実績を補足説明し、書類選考を通過した。

その後のオンライン面接ではグループディスカッションがあった。他も専門性を持つ社会人 3 人で、手応えはなかった、後日合格通知を受け、自分なりに歳上と自覚した上で、ディスカッションをリードする役を買って出た点が評価されたのかと分析し、きっと本番でもそうした役割を期待されているのかなと意識するようになった。

顔合わせ・チームビルディング@事前研修

7 月 5 ～ 8 日に代々木で行われた事前研修で、団長、副団長、そして選考を通過した団員 12 名が、初めて顔を合わせた。年齢差は覚悟していたが、今回は社会人の参加は意外にも 2 名で、大半は 20 歳前後の大学生だった。初日は初対面ゆえの緊張感もあり、これこそ期待されている兄貴分の役割だと思って、ディスカッションをリードした。しかし、たった数日の間に、個性的なメンバーがそれぞれの持ち味を活かして、どんどん手上げ制で役割を決めたり意見を出し合ったりと、順応性を発揮し始め、これはきっと良いチームになるだろうなとわくわくした。

目標は、若い世代と同列で学び楽しむこと

30 代半ばともなると、自らに知識や経験が蓄積されていき、物の考え方や進め方が一辺倒になりがち。しかし、4 日間の事前研修中、若い世代に朝から晩まで囲まれ、私は彼らの着想や思考から多くの刺激を受けた。もちろん社会人だからこそ還元できる知識等あったとは思うが、歳の分このチームを引っ張らなければいけないと意識していた点は、変に肩に力を入れる必要はなく、この個性豊かなメンバーなら大丈夫だ、と考えが変わった。派遣期間中は、会社では絶対に得られない、こうした若い世代と同列で学びを得る機会を、存分に楽しもうと思い、それを個人的な目標として掲げることにした。

事前研修でのチームビルディングの様子

陽気なドミニカ共和国の人々との国際交流

7泊8日の派遣期間を通じ一番印象に残っていることは、現地の人々の底なしに明るく陽気な性格である。日本代表として事業に参加した立場として適切な表現かはさておき、正直な気持ちとして現地滞在中ずっと楽しかった。それも出会った人々の明るさ・優しさ・親切さのおかげと心底思う。

プログラムの一番始めの日・ドミニカ文化センター（日本語学習機関）では、日本語を学びたい現地の学生たちからの質問攻めに遭い、その後の文化交流会では休む間もないほどダンスに誘われた。ダンスは最も苦手なことの一つだったのだが躊躇している暇もないのだから応じるしかない。考えるより先に体が動く。たとえ不格好でもノリで動いていたらオッケー。自然と楽しい。暑いけど手と手を取り合ったら仲も縮まる。コロナ禍ではできなかったFace to Faceのコミュニケーション。自分の肌で感じる“ライブ体験”。ダンス自体ももちろん楽しかったが、こうした考えるより先に体が動くような体験は、社会人になり、何をやるにもあれこれ考えてから行動するようになっていた自分にとって非日常的な体験であり、陽気なドミニカ共和国の人々との異文化交流の中で得られた貴重な経験であった。

その後のホームステイでも、ドミニカ共和国の家庭料理を振舞ってくれたり、観光スポットに連れて行ってくれたり、とにかく親切。3 人のお子さんのいるご家庭だったが、子供たちは遊び相手として私を取り合う始末。1 日半しか滞在しないのだから、なんて考えはこれっぽっちもなく、純粋に明るくて人懐っこくて親切なのだと感じた。

プログラムの後半では、若手日系人とのバーベキュー会があったが、本当にお腹いっぱいになるまで美味しいお肉を焼いて出してくれた。最後のUSAD 大学の学生との交流会でも学生からのプレゼント攻め。本当に親切で、丁重なおもてなしをして頂いたと受け止めている。

こうした明るくて陽気な人々に囲まれる日々の中、私は毎日笑顔を欠かさなかった。たとえダンスが苦手でも頭で考えないでとにかくやってみたら楽しい。明るく元気に振舞えば周囲の人も明るく笑顔になる。私もそんな人になりたい、そんな風に頑張ろうと、ドミニカ共和国の人々との交流を通じて、前向きでポジティブになったと思う。

災害・気候変動の学び・ディスカッション

7月の事前研修後3か月の間、私たち団員は自主的に日本の過去の大災害のことや、ドミニカ共和国のハリケーンのことなどに見識を拡げ、現地派遣に向けて準備をした。

ドミニカ共和国では緊急事態センターを訪問し、災害発生時の政府機関のレスポンス方法について学び、個人的にはその効果的なコミュニケーションルートは素晴らしいと感じたので、その旨をUASD 大学の学生とのディスカッションで伝えた。

一方で、日本の防災教育の浸透ぶりにはドミニカ共和国の皆さんは驚いていた。多くのドミニカ青年が、日本の避難訓練・防災バッグ・防災マップ・近隣の学校への避難などの習慣をリスペクトしてくれ、ぜひ取り入れたいと言って下さるのが素直に嬉しく誇りに感じた。日本人の私からすると逆にそれが当たり前の為、そこにある種のカルチャーショックあるいは文化・価値観の違いというものを見出せたような気がした。

また、UASD 大学の学生とのディスカッションを進める中で面白いなと思った点がある。日本人ならもう少し議論が進んでから成果物の作成にとりかかるようなタイミングで、ドミニカ共和国の人たちは議論が途中でもどんどん模造紙に書き出していくので、進め方が全然違っていて、こうしたプレゼン準備の違いも非常に学びになった。

とはいえこれから国際社会で活躍するにあたり、グローバルな議論の場でどこまで踏み込むか、どこまで譲歩するかの塩梅は大事だと思う。声の大きい人に安易にフォローしてしまうのでなく、自分の意見を持ち臆することなく伝えることが、自己主張の強い外国人相手のディスカッションでは非常に肝要であると感じた。

UASD 大学でのディスカッションを通じた交流

まだまだ奥が深いはずのドミニカ共和国

正直なところ、選考に通るまでドミニカ共和国のことは詳しくなかった。自主研修期間中に多少勉強したものの百聞は一見に如かず。現地でホームステイ先やショッピングモールなどを訪れた際、ドミニカ共和国ってこんなに栄えているのだと素直に驚いた。カリブ海ではトップクラスの経済力があり、足元の円安もあるが物価は日本より高い。青年大臣やUASD大学生などの現地青年と直接お話させて頂き、政治的・経済的にもまだまだポテンシャルがあるエネルギッシュな国だと、現地に足を運んだからこそ肌で感じることができた。

一方で、時間にも限りがあり、また政府系のプログラムということもあって、派遣期間中はドミニカ共和国の負の部分にはあまりスポットライトが当たらなかったとも思う。少なからず垣間見ることができたのは、ビーチクリーンや廃棄物処分場を通じて、国民のゴミ分別の意識に課題があること。「ゴミを投棄しているだけ」の現状は、いかに国土に余力があるとしても、あまりサスティナブルなやり方とは思えず、まだまだ時間がかかる課題に感じた。

また、今回の受入施設で出会った現地の皆様は、比較的豊かに暮らしてらっしゃる人々だと感じたが、あの高い物価に苦労をしている現地のリアルな生活がきっとあるはずで、日常の隅々までしっかり「ライブ体験」するには至らなかった。今回仲良くなった現地青年とのSNS等での繋がりを通じて、現地の様々な情報が入ってくるので、ただ良い部分のみならず、今後もドミニカ共和国の理解を更に深めていけたらと思う。

「学びをリアルに繋がりを未来に」の継続

現地で出会ったドミニカ共和国の人々の明るさ・優しさ・親切さのおかげで、国際交流を楽しむという私の一つの目標は容易に達成できた。ラテンアメリカの陽気さは、自分なりに想像を巡らせていたが、現地の人々からのプレゼント攻めなどの想像以上の歓待は、本当に嬉しかった。彼らのように、自分もこれから前向きに明るく接し、周囲の人を笑顔にできるような人になりたいと思った。SNS を通じて彼らと繋がり続けられることを嬉しく思うが、頂いた恩を返しにいつかドミニカ共和国を再訪するか、または日本に来てもらって最高のおもてなしをしたいと思う。

そして、一緒に長い時間を過ごしてきた日本参加青年との繋がりが何よりの財産と思う。30 代の私にとっては全員が歳下だったが、例えばインターネットの検索スピードやSNSの活用術などは若い人たちが長けている点で、若い世代から学び

を得る機会がたくさんあり、多くの刺激を頂いた。変に年齢を意識せず同列で一緒に過ごせたこの素晴らしい仲間との繋がりを今後も絶やさずに継続していくことは、歳上の私にとっては自分の意識やマインドを腐らせずフレッシュに保つ上で大事なことであり、いつまでも老け込まずにエネルギッシュに公私を充実させられたらと思う。

今はインターネットでの情報入手や、SNS でのグローバルコミュニケーションは容易い時代だが、だからこその“ライブ体験”というか、海外に出てみることや、海外の人との Face to Face のコミュニケーションなど、自分の肌で感じて体験することが益々大切になっている時代だと、事業を通じて改めて感じた。新しい挑戦には、時に小さな失敗も付き物だが、それも含めて得られるワクワクドキドキする気持ちや感触を、より多くの人、特に若い人に感じてもらいたい。この事業で得られた非日常的な経験や体験談など、未来を担う若い世代に伝えていくことが、これから始まる事後活動の 1 つの軸と考える。こうした事後の社会活動を通じて、若い人たちが国際人として一歩踏み出す後押しをし、ひいてはグローバルに活躍する人材の育成に寄与していきたい。

ドミニカ共和国との別れを惜しむメンバー一同

一地域を知るということ

川瀬　春香

はじめに

10 月 4 日から 15 日の 2 週間のドミニカ共和国派遣とその後の国際交流会議を通して、貴重な経験をたくさんさせていただいた。短い期間ではあったが、様々な背景をもつ人との交流や活動を通して、机上では決して得ることのできない学びが多くあった。本稿では、事業を通して私が抱いたドミニカ共和国の所感を「格差」と「防災に対する意識」の 2 点から述べたいと思う。

顕在する格差

ドミニカ派遣団は 11 日間、ドミニカ共和国の首都、サントドミンゴ市に滞在した。サントドミンゴは人口が約 1000 万人にも上る、カリブ海最大級の都市だ。地方に訪問する機会はなかったものの、密な時間を一箇所で過ごしたからこそサントドミンゴが持つ様々な顔を見ることができた。11 日間でみた景色、そして人との触れ合いの中で聞いた話から、私が感じたサントドミンゴについてここで述べたいと思う。

サントドミンゴは、コロンブスが建設した新大陸最初の植民都市だったこともあり、植民都市の面影が色濃く残っている。本派遣中は特にその面影が強いゾーナ・コロニアル(Zona Colonial)、いわゆる旧市街と呼ばれるところに宿泊した。旧市街は、中心の広場にコロンブス像があったり、新大陸初の病院や聖堂が残っていたり、歴史を感じる街並みが残されている一画だ。同時に世界遺産に登録されているエリアでもあるため、観光色も強い。物価も高く、警察が常駐しているため治安も比較的安全だった。特に歩行者天国の通りはヨーロッパ風の建物が立ち並んでおり、どこを切り取っても絵になる美しい通りだった。

旧市街の街並み

旧市街を出て活動する際、私たちは基本的にバスで移動していた。ほとんどの訪問先へと向かう道は、渋滞はひどいものの、想像以上に整備されていた。また、路上の脇には企業広告も見ることもでき、活気のある雰囲気だった。訪問先は立派な建物が多く、バスの窓からは見える高級ホテルや立派なショッピングモールはドミニカ共和国の順調な経済成長を物語っていた。

サントドミンゴ中心部の高層ビル

一方、ホームステイを通して、サントドミンゴの異なる一面を見ることができた。ホームステイ

中、「旧市街に滞在しているのでは、よくサントドミンゴを知ることはできない。サントドミンゴには色々な人が住んでいるのだよ。」というホストファザーの一言により、ホストシスターとサントドミンゴの東部と北部を結ぶケーブルカーに乗ることになった。

2018 年に開通したサントドミンゴ市のケーブルカーは市内の重要な公共交通機関である。地下鉄と同一料金で、地下鉄から乗り換えができるようになっており、地下鉄とケーブルカー、セットで利用することができる。輸送距離が 5 キロに及ぶケーブルカーは 23 の地区を結んでおり、公式ホームページによると、1時間で6000人の乗客の輸送力をもつケーブルカーは毎日 1 万人以上に利用されている。また、ケーブルカーが開通したことで地域における深刻な交通渋滞が緩和されたらしい。乗車価格はホストファミリーの最寄り駅からケーブルカーの終点駅までの往復 55 ドミニカペソと、比較的安価だった。さらに、整備された駅構内はバリアフリーも進んでおり、ケーブルカーが安く、安全で快適な公共交通機関として地域の人々の需要な足となっているのを強く感じた。

ケーブルカーの始発駅であるグアレイ(Gualey)駅はサントドミンゴ最大の貧困地区の中に位置している。そのため、乗車してすぐに、首都特別区の高層ビルを背景に貧困街が広がっていた。ちょうど雨が止んだ後だったので、色鮮やかなバラックが並ぶ狭い道は水浸しになっており、ゴミの山が至るところに放置されていた。首都特別区がある中部と東部を分けるオサマ川（Río Ozama)を沿うように、川の瀬ギリギリまでバラックが建てられているのには衝撃を受けた。大雨が降り、川の水位が上がったら間違いなく甚大な被害を受けるだろう。ホストシスターがこのオサマ川付近は最も治安が悪く、殺人や強盗が絶えないため、近づかないようにしていると語ってくれた。しかしオサマ川上に聞こえてくる爆音で流れるレゲトン（Reggaeton）やバスケットボールやサッカーをする青年たちの声、そして子供たちの陽気な笑い声には考えさせられるものがあった。ケーブルカーが終点へ近づくにつれて、渋滞している車のクラクション音が増え、再び整備された道路と住宅街が見えた。ケーブルカーに揺られていた数分間で、サントドミンゴの「光」と「陰」の部分を垣間見た気がした。

ケーブルカーからの景色

サントドミンゴの「光」と「陰」については、地元の人との交流からも感じることが多々あった。ある青年は、貧困地域出身者が通うことのできる公立病院の質が悪く、衛生面的に多くの問題があることを語ってくれた。渡航前の事前研修で、ドミニカ共和国では新生児の死亡率が多いという講義を受けたが、実際に現地の人から聞く公立病院の現状には心に刺さった。また、UASD 大学での活動中、学生同士で出身高校の話になり、彼らが「公立に行く人は小学校からずっと公立で私立に行く人はずっと私立だから、お互いのことをよく知るのは難しい。」と話していた。日本も私立と公立はあるという話をしたが、彼らとの会話から、

ドミニカ共和国において私立と公立の間では大きな隔たりがあることを感じた。また、ホームステイ中、ホストシスターがSNSで投稿されている市内のスリ事件の動画を見せてくれた。日本では自転車によく乗ることを話すと、バイクすらも危ないのに自転車には乗れない、スリの標的にされると言っていた。彼女が徒歩 10 分の距離に行くのにも車を使うところからも、いかに地域によっては治安が悪いかを感じることができた。

活動を通しても、日系企業の活躍など発展を遂げている「光」の側面を感じることもあれば、ドゥケサ処理場で劣悪な環境で労働するハイチ人をはじめとする「陰」の側面を目の当たりにすることもあった。観光業に力を入れているドミニカ共和国に対して、多くの人は綺麗な海と旧市街のような歴史ある街並みを思い浮かべるだろう。しかし、観光ではなく、本事業で渡航していたからこそ、ほんの一部に過ぎないが、サントドミンゴの「陰」の側面に触れることができた。ドミニカ共和国はすでに中所得国に分類されている。しかし、順調な経済成長を遂げている一方で、深刻な「格差」が課題となっている。ドミニカ共和国では都市部と地方での格差が取り上げられることが多いものの、都市部内でも格差は顕著に存在していた。「光」の背後にある「陰」はしばしば第三者からは不可視化されてしまう。滞在を通して、地域を知る際に「光」だけでなく「陰」の側面にも目を向ける難しさと必要性を学んだ。

ドゥケサ処理場のハイチ人労働者たち

環境問題・防災に対する意識

次に、本派遣のテーマであった「気候変動」と「防災」に対しての所感をここで述べたいと思う。UASD 大学での二日間にわたるディスカッションでは、気候変動とその防災対策について現地学生と議論を交わした。ドミニカ共和国は日本と同様に自然災害に脆弱な地域であり、特にハリケーンによる被害は甚大だ。気候変動による異常気象にも苦しめられている。また、ドミニカ共和国が位置するイスパニョーラ島は数枚の断層が確認されており、地震のリスクも孕んでいる。話し合いの中で、互いに気候変動とそれに伴う自然災害に対して危機意識を強く持っていることを共に確認することができた。

現地学生と交流する中で、互いに強い危機意識を持っているという共通点がある一方で、「防災」に対しては日本が先進国であることを改めて感じた。特に、日本では小学生のうちから頻繁に避難訓練を経験し、防災グッズを常備している一般家庭は多いなど、ハード面以上に、コミュニティ単位での防災に対する対策の必要性を市民が共有している。しかし、実際に現地の学生と話す中で、避難訓練を経験していない人、避難場所を把握していない人など、実際に災害が起こった際にとる行動について不安に思っている人が多いことを知った。活動中に訪問したドミニカ共和国で災害時の対策本部を担う緊急事態センターでは、コミュニティ単位での緊急対策の重要性を述べていたが、コミュニティ単位での防災に対する意識の醸成にはまだ時間がかかるかもしれないと感じた。

また、ハリケーンによる被害の一つである洪水の背景にはゴミの路上投棄による排水システムの機能不全があるという話は印象的だった。確かに、貧困街ではゴミの山が放置されていたのを見た。また、中心部でも資源ゴミ回収ボックスを見かけることはあったが、ゴミの分別がされている様子はなかった。防災の観点からも、「ゴミ投棄」の

現状から脱却する必要があることを学んだ。そのためには市民の間で「ゴミ投棄」がもたらす影響を共有し、ゴミの分別に対する意識を変えることが大切だと思った。

サントドミンゴ内の様々な地域に住む学生たちとの議論を通して、机上では知ることのできない「防災」の現状を垣間見ることができた。

おわりに

本事業を通して、ドミニカ共和国に対する理解はまだ浅いかもしれないが、サントドミンゴという一地域に対する理解を深めることができた。そしてこの理解は、机上ではなく、訪問先での話、目で見た景色、そして何よりも現地の人との交流の中で深まったものだった。そのため、学びだけでなく、事業を通して人との強い繋がりもできた。今回の事業を通して、一地域を良く知るためには、人との関係性の構築が欠かせないことに改めて気付かされた。共にドミニカ共和国へ渡った仲間はもちろん、現地の人と帰国後も続く繋がりを構築することができたことは素直に嬉しく感じる。

ドミニカ共和国の国民性は明るくホスピタリティに溢れており、派遣中は人の優しさにたくさん触れた。今後は彼らからもらった優しさや学びを、日本で還元していきたいと思う。そして、ドミニカ共和国が日本人にとってより馴染みのある国になるよう努めていきたい。

参考文献

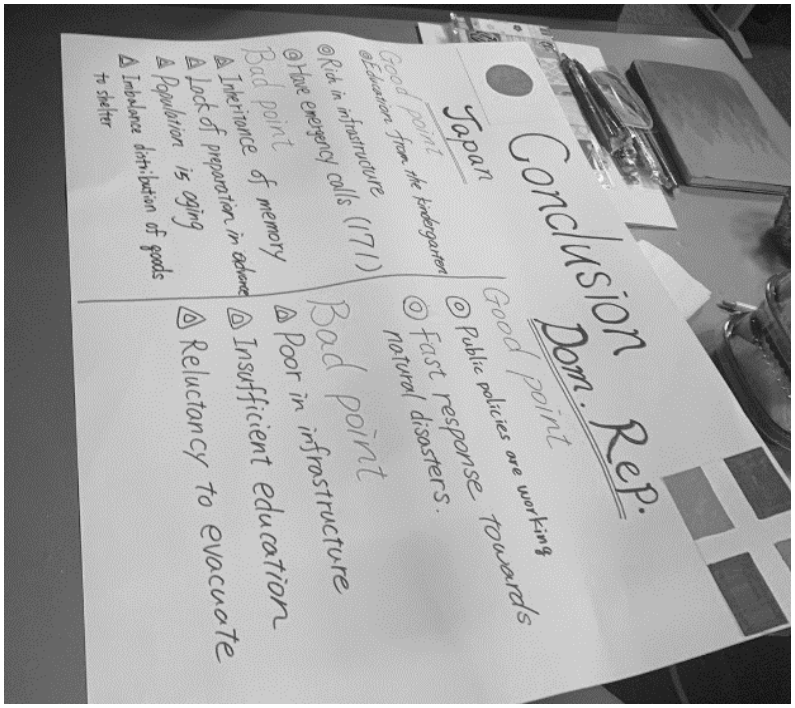
サントドミンゴ市内のケーブルカー、公式ホームページ
https://www.telefericosantodomingo.com

ドミニカ共和国派遣　ディスカッション成果

10 月 11 日・12 日開催

場所	サントドミンゴ　サントドミンゴ自治大学（UASD）
テーマ	日本とドミニカ共和国における気候変動問題と災害対応について
トピック	両国の気候変動問題による影響 災害リスク管理の手法(Mitigation, Preparedness, Precention, Response)
参加者	日本参加青年 12 名、UASD 大学生 20 名
スケジュール	1 日目 ― 10/11（水） 10:30 ・開会の挨拶 10:40 ・両国紹介プレゼンテーション（ともに 10 分ほど） 11:00 ・ディスカッション第一部 ～両国の自然災害と防災について 12:00 ・学長の挨拶 12:30 ・昼食 14:00 ・校舎見学（主に学内の災害を専門に研修している研究室） 14:30 ・ディスカッション第二部 ～自然災害 or 防災に絞り込み 18:00 ・両国からの踊り披露 2 日目 ― 10/12（木） 09:00 ・ディスカッション第三部 ～考察・発表準備～ 10:30 ・リクリエーション 11:00 ・グループ発表 12:00 ・閉会式 12:30 ・昼食 15:00 ・全体終了

ディスカッションテーマ：Disaster Managment
1. ドミニカ共和国での防災の現状 ▪ 防災時は、緊急事態センター(COE)が対策本部となり、政府や各省、軍隊や消防等の公的機関との連携、国連や諸外国・一般企業等とのコミュニケーションに優れている。過去の災害を踏まえハード面をしっかり整っている印象。 ▪ よくある災害はハリケーン。道路のインフラが弱く、雨が降ると交通は麻痺し、川の水位が溢れると川沿いの貧困地域の被害は拡大する。 ▪ 様々なデータを駆使した上、コミュニティ単位で緑・赤・青の 3 段階で危険レベルを分類し、様々なメディアを通じて人々に大きな危機が迫る前に情報を伝達するものの、現実には退避せず自宅待機したがる人も多く、避難所が確保されていない、そもそもどこかわからない等、ソフト面に課題が残る。 2. 日本での防災の現状 ▪ 学校や企業で年 1 回避難訓練が実施されるなど防災教育が行き届いている。 ▪ 最寄りの学校が避難所になることや、防災マップで危険地域が周知されているなど、自治体や地域社会の公助・扶助の精神が根付いている。 ▪ 高齢化・核家族化が進んでいる為、災害時に要介護者や一人暮らし老人の孤立が懸念される。高齢者がスマホに不得手な為、災害アプリ等の IT を活用した対策については遅れを取っている。 3. 上記現状を踏まえた上での意見交換の内容 ▪ 災害対策を効率よく進めるため、緊急事態センターが旗振り役となるドミニカ共和国のコミュニケーションルートは機能的・効率的で長所だと感じた。 ▪ 日本の防災教育の浸透ぶりにはドミニカ共和国の皆さんは驚いていた。災害時に自宅を離れたがらない人が多く、その結果被災が広がってしまうとのこと。災害時はスピード感ある対応が命を救うと改めて気づかされ勉強になった。 4. 発表の内容 ▪ 模造紙を使って、ドミニカ青年から日本の防災対策の長所および短所について、日本参加青年からドミニカ共和国の防災対策の長所と短所について発表し合った。



写真①：発表時に使用した模造紙

写真②：Group 2 のメンバー

執筆者：髙田　康士郎

ディスカッションテーマ：Disaster Managment

1. ドミニカ共和国の現状

- 長所

派遣中に訪問した COE（緊急事態センター）のような最新設備を整えた情報発信施設の存在し、人々の災害に関する関心が高まっている。

- 短所

都市部や上層階級とそれ以外の家庭の間の災害に対する意識のギャップが存在し、また都市から離れた場所やスラム街など住んでいる場所によって情報の伝達が遅い、又は行き届かないことがある。加えて災害対策に対する投資不足が問題とされている。

2. 日本の現状

- 長所

テレビやアプリ、防災無線など様々なツールを通じて災害の発生が人々に迅速に伝達される。防災マップが地域ごとに制作されており、避難経路が明確となっている。「おかしもち」と呼ばれる単語が存在し、小学校の避難訓練から教えられているため災害が発生した際の行動が国民全員に周知されている。

- 短所

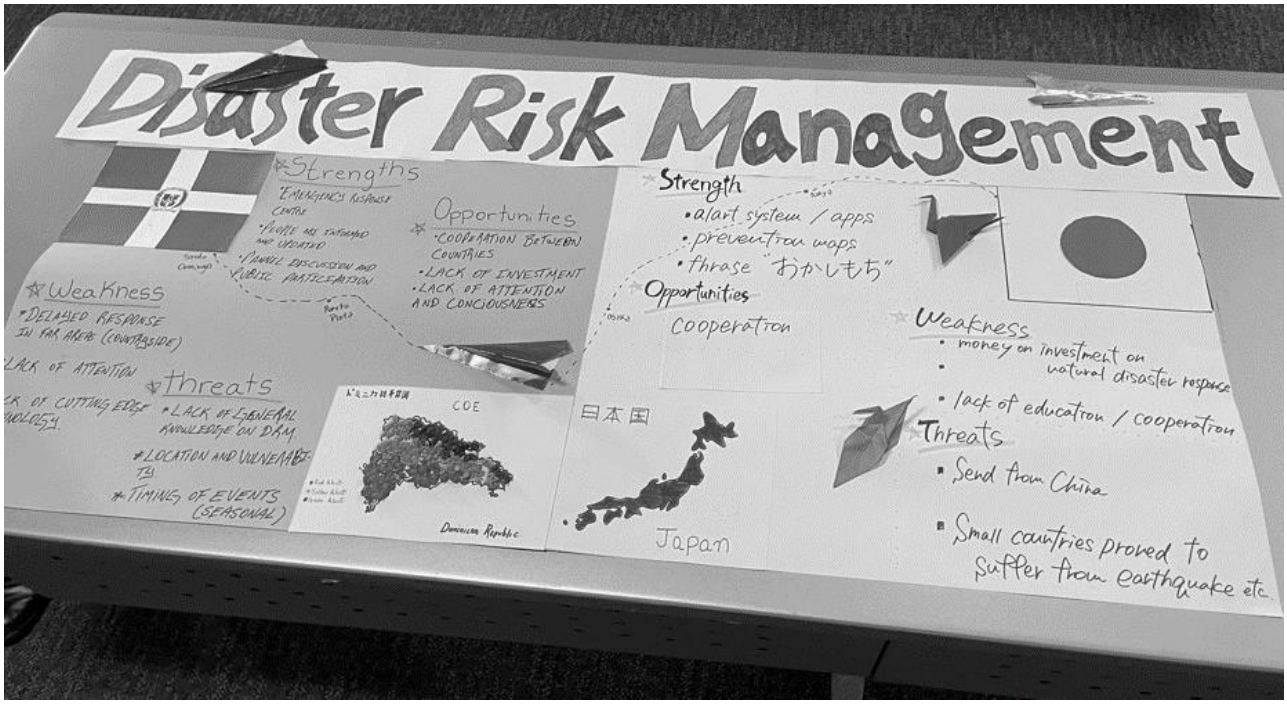
自然災害への対応に関する投資が不足している。他国との連携をもっと強化するべきである。

3. 上記現状を踏まえた上での意見交換の内容

- 両国ともに災害対策に関して取り組みを行なっているが、全ての国民に情報が伝達できているのか否かが両国の違いだと感じた。日本ではテレビやアプリ、ラジオや地域の防災無線など各年代に情報が伝わるあらゆる手段で災害の発生や事前の防災対策に関する情報が伝えられている。しかし、ドミニカ共和国では階層の違いによって未だに災害に対する意識の違いが存在し、災害が起きた際にも情報伝達に時間差が生じている。また両者に共通して言える課題としては投資不足と他国との連携の不足が挙げられた。日本は災害大国と言われるほどあらゆる種類の災害が毎月、毎年、発生している。その中で現状の投資に加えて企業の防災投資を増加させ、国民の命を守るとともに、災害に関する費用をトータルで低減することが可能となる。両国の強みと問題点を比較しながら意見交換を行うことで、日本の災害対策が進んでいることを感じることもできた。

4. 発表の内容

- SWOT 分析を用いて、ドミニカ共和国・日本の強み、弱み、プラスの外的要因（機会）、マイナスの外的要因（脅威）の 4 つをそれぞれ挙げた上で、それぞれの国でこれから導入するべき災害対策、政策に関して意見を交わし、考えを深めた。



写真③：発表時に使用した模造紙

執筆者：竹内　愛璃

ディスカッションテーマ：Climate Change

1. ドミニカ共和国の気候変動の現状

- 気候変動によってもたらされる被害としては、ハリケーンをはじめとする大雨の増加・海藻の大量発生・山火事・海面上昇が挙げられる。まず、大雨については、地域ごとに脆弱性が異なり、例えば、サントドミンゴでは土地が低いため被害が大きくなってしまう。昨年の 10 月には大雨によって街が浸水し、復旧までに 48 時間もの時間を必要とした。海藻の大量発生も気候変動の影響を受けており、sargazo という褐色藻類が大量発生し、海の色が変化してしまうほど増えてしまう現象が引き起こされていた。この大量発生は、海流の組み合わせや海の汚染の影響も受けているが、地球温暖化による海水温の上昇による影響も大きく、気候変動によってもたらされる課題の一つである。最後に、山火事についても気温が上昇することによって自然発火が発生し、大規模な山火事が起こる頻度が増加している。
- 気候変動に影響を与える要因としては、過度な森林伐採や自動車の使用が挙げられる。ドミニカ共和国では生活のために木を伐採して燃料とする人もおり、木の伐採についての制限も十分に行われていないため、木が必要以上に伐採されやすい。自動車については、長距離の鉄道が整備されていないため、都市間の移動が自動車によって行われることが排気ガスの排出につながっている。
- 気候変動によってもたらされる問題への対策としては、海藻対策として sargazo の除去やビーチクリーン、洪水対策としてサントドミンゴでの排水システムの構築と維持を行っている。しかし、気候変動そのものの対策ではあまり対策が取られていなかった。その原因としては、政府が気候変動対策ではなく、観光に投資を集中してしまうことが根本にある。

2. 日本の気候変動の現状

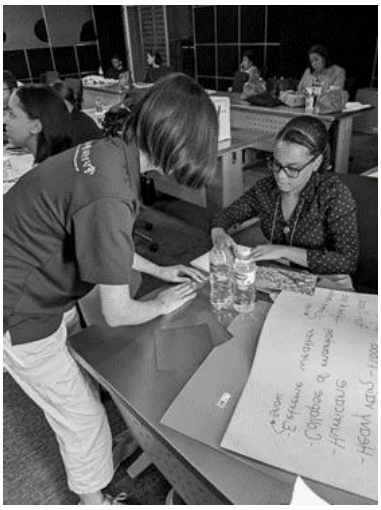
- 気候変動による被害としては、大雨、台風、山滑り、極端な気候の 4 点が挙げられる。特に水害による被害が大きく、この点はドミニカ共和国とも共通点が大きかった。
- 影響を与える要因としては、自動車や工場などからの CO2 の排出が大きいが、養生風力発電に代表されるような再生可能エネルギーの推進によって原因そのものへの対策を行っている。

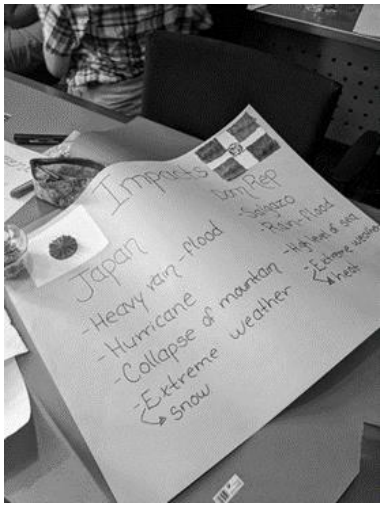
3. 上記現状を踏まえた上での意見交換の内容

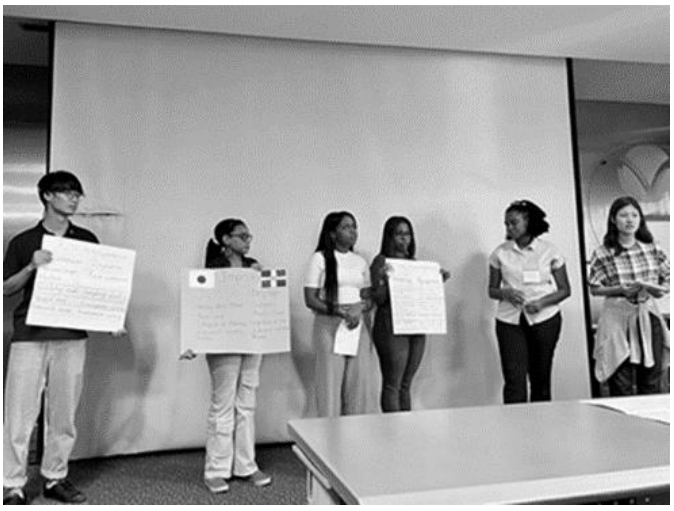
- 水害が多いという点で両国には共通点があるものの、海藻の繁殖や大雪など両国に固有の問題も存在する。ドミニカ共和国で、気候変動そのものの解決にむけた取り組みが少ない理由は、気候変動についての教育の欠如があるという意見が出た。

4. 発表の内容

- 気候変動によってもたらされる影響について、両国の対策を予防と対応にわけて発表した。例えば日本の台風に対する予防と対応では、それぞれ建築基準法によって危険な建物の建築を制限することと、緊急ダイヤルによって緊急時にも連絡を取れるシステムの構築を発表した。




Japan
-Heavy rain -flood
-Hurricane
-Collapse of mankan
-Extreme weather
snow



執筆者：中野　旭

ディスカッションテーマ：Climate Change

1. ドミニカ共和国の気候変動の現状

- 主たる関心は、ハリケーンによる洪水被害であった。またこれに伴って起きる土砂災害も大きな議論の的であった。他にも漁業における被害では色鮮やかなベラ等の魚の減少が挙げられた。
- 特に一点目に補遺すべきは、スラム街地域における地滑りだ。スラム街の多くは丘陵地域に位置しているため、土砂災害の被害を受けやすいが、住民はそれに対策するほどの余裕はないため今も対策が進まぬままだそうだ。また災害に対する態度や考え方も日本のそれとは大きく異なるらしい。

2. 日本の気候変動の現状

- 日本では様々な気候変動による自然災害が起きており、まずはそれらについての紹介およびディスカッションが行われた。
- 先ず注目されたのは洪水である。それに生態系の変化と漁業への影響、台風が続いた。近年特に九州や近畿地方で大雨による洪水被害は拡大しており、実際の写真を見せながらその惨状さをドミニカ共和国の青年に伝えた。
- 一方、東京では地下に巨大空間を作ることにより、大雨は起きた際にも大規模に排水することによって洪水被害を極限抑えているという事を伝えると、それはドミニカ共和国にはない取り組みであるそうだ。

3. 上記現状を踏まえた上での意見交換の内容

主に２つある。

- 一つは両国の対策を知ることによって、自国に取り入れられる学びがあるということに合意した。ドミニカ共和国の青年たちにとっては、東京地下に巨大な地下空間があり大雨が起きても洪水を防げるということが印象に残ったようだった。ドミニカ共和国では災害が起きると予想されると仕事は殆ど休みになるらしいが、日本では出社を強要する会社も少なくないように思える。社員を守るべき会社としてこの国の考え方を取り入れることも出来よう。
- また大衆の自然災害に対する考え方が重要だという共通の認識を得た。ドミニカ共和国では、ハリケーンによって仕事が翌日休みになった場合、スーパーによって酒を買い込み、路上にてスピーカーで音楽を爆音で流しながらパーティをする人がとても多いということだ。即ち喩え政府が気象情報を正確に予想したり、行政が設備を整えたりしても、国民・大衆の自然災害に対する意識の向上無くしては、被害を抑えられることはない。

4. 発表の内容

- 上記三点を纏め、発表した。即ち「ドミニカ共和国での現状」と「日本での現状」を具体的な事例と共に紹介し、それらを帰納して得られた結論を述べた。

執筆者：菩提寺　航

UASD とのディスカッション感想文

＜分科会ごとの感想文：ディスカッションテーマ：Disaster Managment＞

執筆者：髙田　康士郎

1. どのような準備をしたか

- 過去に日本で起きた大災害（Ex. 阪神淡路大震災、東日本大震災、熊本地震）について、実際に体験された人の生の声をヒアリングし、当時の政府や自治体、個人の対応について見識を拡げた上でディスカッションに臨んだ。

2. ディスカッションを通じて得たこと、発見したこと

- 災害時は誰もがパニックになるものなので、災害対策を効率よく進めるため、緊急事態センターが旗振り役となるドミニカ共和国のコミュニケーションルート・災害発生時のレスポンスのやり方は素晴らしいと感じた。
- 日本の防災教育の浸透ぶりにはドミニカ共和国の皆さんは驚いていた。多くのドミニカ青年が、日本の避難訓練・防災バッグ・防災マップ・近隣の公立学校への避難などの習慣をリスペクトしてくれ、ドミ共にもぜひ取り入れたいと言って下さるのが素直に嬉しく感じた。日本人の私からすると逆にそれが当たり前の為、そこにある種のカルチャーショックあるいは文化・価値観の違いというものを見出せたような気がした。日本人ならもう少し議論が進んでから成果物の作成に問いかかるようなタイミングで、ドミニカ共和国の人たちは議論が途中でもどんどん書き出していくので、ディスカッションのやり方が全然違っていて面白かった。少し引いて俯瞰してみると、良いものを作ることに重きを置く日本人と、良く見せることを意識する外国青年とで、プレゼンスタイルも全く違って非常に学びになった。とはいえこれから国際社会で活躍するにあたり、グローバルな議論の場でどこまで踏み込むか、どこまで譲歩するかの塩梅は大事だと思うし、少なくとも長いものに巻かれてしまうようなことなく、自分の意見を持ち臆することなく伝えることが、自己主張の強い外国人相手のディスカッションでは非常に肝要であると感じた。

3. 相手国への印象がどのように変わったか

- ラテンアメリカの陽気な感じは予想通りであったが、大学生個人個人からのプレゼント攻撃を受け、想像以上の親切さで歓待して下さって嬉しかった。優しく温かい性格、そして明るく元気なマインドは、周囲の人をも笑顔にすると思うので、彼らのように、自分もこれから前向きに明るく接せられるような人になりたいと思った。
- アニメ等を通じて日本に憧れを持ってくれている学生が多かったが、それでもドミニカ共和国のことを誇りに思い、前向きに自国の良いところをたくさん主張してくれて、自分も日本の良いところを前向きに積極的に伝えていける人物になりたいと思った。

＜分科会ごとの感想文：ディスカッションテーマ：Disaster Managment＞

執筆者：竹内　愛璃

1. どのような準備をしたか

- ドミニカ共和国派遣団で派遣前の 9 月に 2 回、オンラインディスカッションを行い、災害対策に関する意見を英語で話す練習を行った。この事前のディスカッション練習を通じて、両国の災害・気候変動対策に関して英語で話す練習を行い、団員のそれぞれが自分に足りないものを派遣前に発見し、補った。最初は英語で話すことに躊躇いや恥じらいを感じている団員もいたが、2 回目に行った時にはより自分の意見を表現できるようになっていたのでシミュレーションを行えたことは有益だったと感じる。
- 個人的には、自分の意見をスムーズに英語で話すことが難しいと感じたため、積極的に海外の友達と意見を交わし英語を話す機会を増やしたり、毎日日記を英語でつけたりするなど「英語」に触れるように心がけた。

2. ディスカッションを通じて得たこと、発見したこと

- ディスカッションを通じて、日本が災害対策において進んでいることを実感すると共に改善するべき点が山積していることを改めて認識した。情報の伝達に差があるドミニカ共和国と比べて、国民全員を取り残さないように様々なデバイス、方法を用いて災害やその対策を発信している点は日本の強みだと感じた。

3. 相手国への印象がどのように変わったか

- ディスカッションを行う前は、ドミニカ共和国は特に災害対策に関して日本よりも遅れをとっているイメージを抱いていた。災害大国の日本は、世界各国と比べても特に過去の経験を活かしながら数多くの政策を講じており、教育の面でもこの経験を取り入れ、全世代の日本国民が災害に関する知識を持っている。その一方でドミニカ共和国ではハリケーンの到来に伴った洪水やインフラの没落等の被害を受けている動画を数多く目にしていた為、あまり政策を行っていないと思っていた。しかし自身が抱いていたこのイメージとは異なり、実際はドミニカ共和国政府は災害・気候変動に関して多くの政策を行い、今回実際に私たちも訪れた緊急事態センターのように最新技術を取り入れ、対策を行なっていると知った。そしてこの現状での課題は、対策自体にあるのではなく、貧富の差など他の事柄が要因でその政策がうまく機能していない部分にあると学んだ。一つの国を捉えて理解する際には、災害・気候変動対策のように一つの括りだけを見るのではなく、社会全体を包括的に見ることでその国の実際の姿が見えてくると気付かされた。

＜分科会ごとの感想文：ディスカッションテーマ：Climate Change＞

執筆者：中野　旭

1. どのような準備をしたか

- 英語のディスカッションに備え、英語で議論する機会を作るとともに、英語で気候変動・災害についてまとめられているホームページを閲覧し、専門用語を身につけた。
- 自分の出身地について、どのような災害対策があるかを調べ、情報交換をメンバー間で行った。

2. ディスカッションを通じて得たこと、発見したこと

- ディスカッションスタイルは完全に違っていた。私たち日本人はまず議題を出し、次に議題について議論をし、その後にポスターなど資料を作るなど作業ごとに分けた工程を想定していた。ドミニカ共和国の学生は思いつく議題から順に議論を進めたり、議論が半分ほど終わった段階で、話終わった部分のポスターの作成に移ったりと、驚くことが多かった。日本で行う、ある程度同じやり方が共有されている議論と比較すると進みにくいと感じることも多かった。
- しかし、このような価値観の違う相手との協業から新たなアイデアは浮かぶのだろうと感じた。例えば、自分が知らないエピソードや知識を相手は知っているため、それを聞くことで、今まで考えなかったような観点を考えることにつながるかもしれない。
- 意外であったことは、日本人が比較的議論を主導したことである。あまり学校で議論する時間をとっていない日本の教育では、相手の勢いにのまれるのではないかと想像していた。しかし、私たちが議論全体の枠組みを示したり、議論をまとめたりすると納得したような顔でうなずいてくれた。
- 自分の考えをより注目して聞いてもらうために、なぜその考えが大切なのかを説明することの大切だと感じた。価値観に広がりがあると、自分の考えていることを相手が読み取ることが少なくなる。日本でよく言われる「以心伝心」や「一を聞いて十を知る」ことに期待する考えは捨てようと思った。

3. 相手国への印象がどのように変わったか

- 第一に、おしゃべりではあるが議論になるとあまり話さなくなる人も多いことに驚いた。
- 海が身近な彼らは、エルニーリョ・ラニーニャや海藻の異常繁殖など海に関わる災害、気候変動により敏感だった。生きている環境で注目する視点が変わることを感じ、興味深く感じた。

＜分科会ごとの感想文：ディスカッションテーマ：Climate Change＞

執筆者：菩提寺　航

1. どのような準備をしたか

- ドミニカ共和国の現地学生とディスカッションをするにあたって、自国と相手国の気候変動及び災害対策に関する知識をインプットする事を心掛けた。具体的には日本でどのような災害対策・教育が行われているのかや、ドミニカ共和国ではどのような考え方を元に災害を受けているのかなどを調べた。
- また、ディスカッション自体の準備として、団員で集まり英語ディスカッションの練習をした。テーマに関する難しい英語語彙の紹介や英語ディスカッションでよく使うフレーズ、実際に英語で気候変動に関するディスカッションを行った。このような準備を行ったおかげでディスカッション係のみならず他のメンバーも率先して現地でのディスカッションを先導できたと感じている。

2. ディスカッションを通じて得たこと、発見したこと

- 先ず内容に入る前に、ディスカッション自体の進め方で勉強に資するものを得られた。それは違う文化を持つ人たちを、如何に建設的に議論を進めることに促すことの難しさという事だった。日本ではまず前提を確認し、タイムキーパーや書記など役割を決め、問題を発見し、解決策を挙げていき、結論を導くと言う一定のプロットがあると思うが、それがあまりドミニカ共和国では浸透していないようだった。実際にディスカッションの中でもいきなり問題の提起をされたり、それに対する解決策の議論になったりとかなり建設的な議論が進め辛かった。将来グローバルな環境でディスカッションを先導するにあたり、建設的な議論の進め方を提案し定着させることの難しさと重要さを実感した。

- また内容面では自分の知識の浅さを実感する場面が多々あった。事前に日本とドミニカ共和国におけるケースのインプットはしたものの、国連における枠組みや環境対策に関する議定書、アメリカ等の中央・覇権国におけるケースのインプットの不足を感じた。二カ国間でのディスカッションだからと言ってその二カ国の知識だけで挑むのではなく、それを取り巻くグローバルな環境に通じる知識があればより深い議論を導けたはずだ。

3. 相手国への印象がどのように変わったか

- UASD でのプログラムが始まるや否や、沢山の贈り物を頂き、ここでもドミ共の人々のおもてなし精神を肌で感じた。
- ディスカッションにて日本で暗黙裡に浸透しているプロットが通じないと感じたと共に、個人主義的な側面がドミ共の人々にはあるのではないか。それは偏に自身の担当部分に集中し、周りとの協働が蔑ろになっているメンバーが居たためだ。ただ自分の世界に没頭していた彼らも、ディスカッションが終わり歓談の時間になると、明朗なドミニカ共和国の国民性を取り戻していた。